

関 幸彦編

『武蔵武士団』

吉川弘文館 二〇一四・三刊
A5 二九六頁 二五〇〇円

本書は、中世武士の典型とされた武蔵武士について、近年の研究蓄積をふまえて解説し、広く一般の読者と共有することをめざしている。論考の内容は、「I 源平の争乱と武蔵武士」「平家物語の世界」・「II 南北朝動乱と武蔵武士」「太平記」の世界――「III 武蔵武士団のその後」・「IV 武蔵武士を歩く」の四つにわかれ、武蔵武士団の最新のイメージを、時系列と地域の広がりから把握できる。

関幸彦「序 武蔵武士団への招待」では、武士団研究の流れ、武蔵の地勢、古代以来の関東と武蔵武士の歴史などの切り口から、武蔵武士団と彼らを生み出した政治的・地勢的環境を概観する。菊池紳一「秩父氏の諸流と源平争乱」は、武蔵最大の武士団である秩父一族が、国司権力と連携しつつ国内に展開する様相をあとづける。上杉和彦「武蔵七党と『平家物語』の世界」では、『平家物語』を題材として「武蔵七党」の動向を整理しつつ、南北朝期における武士の一揆に対する認識が、語り本系『平家物語』の「七党」用語と関わっていたことなどを指摘する。細川重男「鎌倉期の血縁、婚姻関係」では、武士の婚姻関係が政治的に機能するケースとそうでないケースなどをふまえて、歴史研究における

証拠提示の重要性という基本的な問題に言及する。

高橋典幸「鎌倉幕府の滅亡と武蔵武士」では、鎌倉幕府直隸軍という武蔵国御家人の特質と多様性を示している。新井孝重「南北朝動乱と『太平記』」では、東国における南北朝期の合戦を『太平記』から概観し、武蔵武士団、道路や宿、時衆や聖のあり方を詳しく述べる。角田朋彦「南北朝武士団の諸相」では、中小武士団が所領維持のためにとつた多様な政治的選択や、平一揆のリーダー河越氏・高坂氏の動向を、政治史と関連づけて詳細に述べる。角田「南北朝期の血縁、婚姻関係」では、武士団の結合の基礎が、血縁（父系結合）から地縁に変化する過渡期として、個々の武蔵武士や一揆を具体的に紹介する。

高橋「東国武士の移動と移住」では、遠隔地所領の獲得や鎌倉での活動などが武蔵武士団と本領との関係を薄める要因になったこと、一方、本領との関係を維持する指向も残っていたことを指摘する。岡田清一「東遷した武士団」では、文治五・六年の「奥羽合戦」（奥州合戦）をきっかけとした武蔵武士団の東遷（北遷）の類型を明快に整理する。長村祥知「西遷した武士団 中国方面」、同「西遷した武士団 鎮西方面」では、武蔵武士団が本領から西国所領に重点を移す事例、逆に本領に残ることを選択した事例を紹介する。また、宝治合戦や蒙古襲来に加え、鎌倉幕府滅亡後の新恩所領獲得も西遷の契機となったことを示す。

角田「古戦場」、山野井功夫「館・城・街道」、下山忍「信仰と板碑」では、武蔵武士団が活動した場や、彼らの生息・心性に関わる史跡・史資料について、史料所見や発掘調査の成果などを踏

まえて詳しく論じている。

また、十一編に及ぶ「コラム 武蔵武士の群像」(久保田和彦)が時代順に配置されており、武蔵武士の面貌や関係史跡が手際よく紹介されている。さらに、巻末には「関連編著書・論文一覧」(久保田編)が配され、武蔵武士団、ひいては中世武士研究・東国史研究に有益である。

以上、最新研究に基づく叙述と豊富なデータを備えた本書は、一般読者はもとより学界でもひろく活用されるべき成果である。

う。(清水 亮)